

北海道考古学会だより

第 107 号

2013. 11. 10

目 次

2013年度 遺跡見学会実施報告	1
参加体験記：矢野悦子さん「遺跡見学会に参加して」	1
北海道考古学会創立50周年記念講演会実施報告	3
遠藤龍畝氏：記念講演会『北の遺跡を発掘する－北海道考古学の成果と展望－』を終えて	4
2013年度 遺跡調査報告会のお知らせ	5
月例研究会のお知らせ	5
北海道考古学会の歩み（7）	6
事務連絡	7
入退会者のお知らせ	7
会費納入のお願い	7
学会の新メール・アドレスのお知らせ	7
会誌編集委員会からのお知らせ	8

2013年度遺跡見学会実施報告

今年度の遺跡見学会は、「余市町・小樽市の遺跡・博物館を巡る」をテーマとして、8月31日(土)に実施しました。今回は43名のご参加をいただき、余市町・小樽市の遺跡・博物館施設と現在余市町内で発掘調査中の遺跡の見学を行いました。8月は雨の日も多く、天候の懸念もありましたが、当日は雨に当たることなく見学を終えることができました。

余市町の登町4遺跡では、実際に発掘作業員の方々が調査現場で働いている様子を見学することができ、参加者の方々は担当者による解説に聞き入り、熱心に質問する姿もみられました。今回の参加体験記を矢野悦子さんにお願いしました。

見学コース

1. 余市町フゴッペ洞窟（余市町教育委員会）
2. 余市町水産博物館（余市町教育委員会）
3. 余市町登町4遺跡（余市町教育委員会）
4. 小樽市総合博物館運河館（小樽市教育委員会）
5. 小樽市手宮洞窟・小樽市総合博物館（小樽市教育委員会）

ご多忙のなか対応してくださった各担当の方々にお礼申し上げます。

参加体験記：「遺跡見学会に参加して」

矢野悦子

8月31日、晴れの日朝、私たち遺跡見学会の参加者を乗せたバスは、札幌駅北口のバス乗り場を出発しました。参加者は、毎年参加されているのか、見たことがあるような方も何人かいました。今年の北海道考古学会遺跡見学会のテーマは『余市町・小樽市の遺跡・博物館を巡る』というものでした。

バスは、まず余市町に向かいました。行きのバスのなかで、引率者の方が担当している発掘調査現場の説明をしていただきました。北海道埋蔵文化財センターの酒井さんは、道南木古内町の線路脇を調査しているとのことでした。恵庭市郷土資料館の鈴木さんは、ユカンボシ遺跡の調査をしているとのことでした。私は、その遺跡で発掘作業員として働いています。

引率者の案内が終わって間もなくすると、バスは余市町に入りました。しばらく海岸沿いを走っていると、最初の見学先のフゴッペ洞窟に到着しました。以前から余市町の洞窟に壁画があるという話は聞いていましたが、今回の見学会ではじめて実際の壁画を見学することができました。フゴッペ洞窟の見学施設は、想像していたよりも立派でとてもきれいでした。フゴッペ洞窟に描かれている有翼の人物のようなものは、翼を持つ姿から、現代の私にはまるで天使の姿のように見えました。

二番目の見学先は、余市町水産博物館です。入館前は、水産漁業関係の資料ばかりと思っていましたが、博物館の奥には考古資料の一角がありました。

三番目に訪れたのは、登町4遺跡の発掘現場です。見学会の当日は土曜日でしたが、この遺跡は土曜日にも調査を行っているとのことで、私自身が恵庭市で発掘作業員として働いているので、ほかの町の発掘調査の様子を見学できるのを楽しみにしていました。実際の現場では、掘り下げる土が固そうで、大変そうにみえました。現場の事務所では出土遺物の見学をさせていただきました。

四番目に訪れたのは、小樽運河沿いにある、小樽市総合博物館の運河館です。運河館では日本最古のハンバーグがあるとの説明を受け、大変驚きました。

五番目に訪れたのは小樽市手宮洞窟です。洞窟内部には余市町フゴッペ洞窟と似たような壁画があり、関連について考えさせられました。

すべての見学が終わり、バスで札幌に向かっている途中で雨が降ってきました。前日までの天気予報では、天候の心配もしていましたが、見学先で雨に打たれることがなくてよかったと思います。今回は行程の関係でストーンサークルを見学することができなかったのですが、今度はストーンサークルをぜひ見学したいと思いました。

最後になりますが、今回の見学会の企画を担当してくれた関係者の方々、見学先で解説をしてくれた関係者の方々に深く感謝をいたします。ありがとうございました。次回の見学会も楽しみにしています。



余市町フゴッペ洞窟



余市町水産博物館



余市町登町4遺跡



小樽市総合博物館運河館

北海道考古学会創立50周年記念講演会実施報告

10月5日(土)、北海道考古学会の創立50周年を記念し、『北の遺跡を発掘するー北海道考古学の成果と展望ー』と題した講演会が北海道大学学術交流会館にて行われました。

講演会では、基調講演としてキウス周堤墓群とモヨロ貝塚についてご講演いただくとともに、北海道の考古学研究の進展に寄与した各時代を代表する遺跡についてポスター発表いただきました。当日は学会員のみならず多くの方々にご参加いただき、考古学に対する関心の高さや学会として今後担うべき責任の重さについて改めて感じる機会となりました。

開催にご協力いただいた関係者の皆様方に深く感謝申し上げます。

なお、記念講演会について報告するにあたり、遠藤龍畝氏よりご寄稿を賜りました。併せてお礼申し上げます。

講演会プログラム

開催あいさつ

基調講演 1 キウス周堤墓群について

列島北東域縄文文化後半期の地域社会とキウス周堤墓群

野村 崇

大谷敏三

小杉 康

ポスター発表

遠軽町白滝遺跡群

長沼 孝

今金町ピリカ遺跡

宮本雅通

帯広市大正3遺跡

山原敏朗

森町鷺ノ木遺跡

高橋 毅

函館市南茅部縄文遺跡群

阿部千春

釧路市東釧路貝塚

石川 朗

礼文町船泊遺跡

藤澤隆史

余市町フゴッペ洞窟

乾 芳宏

恵庭市西島松5遺跡

鈴木 信

北見市常呂川河口遺跡

武田 修

札幌市K39遺跡

守屋豊人

標津町標津遺跡群

小野哲也

江別市江別古墳群

稲垣和幸

奥尻町青苗砂丘遺跡

皆川洋一

枝幸町目梨泊遺跡

高畠孝宗

平取町二風谷遺跡群

森岡健治

上ノ国町勝山館跡

塚田直哉

北海道考古学会50年の歩み

野村 崇、高瀬克範、出村文理、平川善祥

基調講演 2 モヨロ貝塚について

米村 衛

最寄貝塚の学史的評価と最近の調査成果

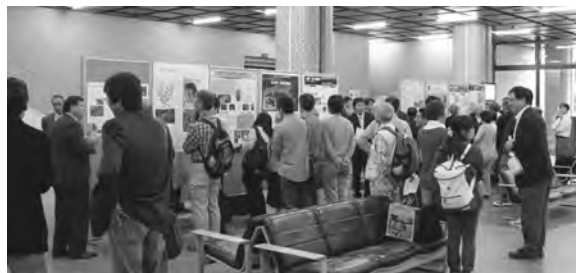
熊木俊朗

閉会あいさつ

大島直行



講演会



ポスター発表

記念講演会『北の遺跡を発掘するー北海道考古学の成果と展望ー』を終えて

遠藤龍畝

北海道における考古学研究の流れを極めて大まかにみると、歴史史観の転換という観点で見れば戦前と戦後に分けることができる。日本考古学の新たな展開の端緒となったのは、戦後間もない西の『登呂遺跡』の発掘であり、東は『モヨロ貝塚』の発掘調査であった。

北海道考古学会が設立された昭和38（1963）年は、まさにこのような胎動期を経て誕生した時期といつてよい。

講演に先立ち、野村 崇（創立五十周年記念講演会特別実行委員長）氏から、「北海道考古学会が今日の成果を踏まえ、より多くの研究者との関わりと共に益々発展していくことを願いたい。」という趣旨の言葉があった。基調講演には、大谷敏三（元千歳市教育委員会）氏の『キウス周堤墓群について』と小杉 康（北海道大学大学院文学研究科教授）氏の『列島北東域縄文文化後半期の地域社会とキウス周堤墓群』、米村 衛（網走市教育委員会）氏の『モヨロ貝塚について』、熊木俊朗（東京大学大学院人文社会系研究科准教授）氏の『最寄貝塚の学史的評価と最近の調査成果』があり、いずれも近年における調査研究の経過で得られた成果を踏まえ、これまでの学史的な評価や解釈を検証しながら、新たな問題点を浮き彫りにして本質の追究に向かおうとする内容であり、発表者の並々ならぬ意気を感じた次第である。

特に、北海道と北東北地方を中心とする環状列石や周堤墓など、それに関連する葬送儀礼遺構の発掘調査は数を増してきている中で、多くの新たな知見をどう理解し組み立て、時代性や地域性、あるいは社会構造の質と変化をその形態や組成の中から少しでも探ることができるかが望まれていることであり、またそれは今後に大きな課題として取り組まなければならない重要な要件であることを示したことは意義が深い。

本年、北海道・北東北三県における18遺跡が縄文遺跡群として世界遺産登録に向け推薦申請を進めてきたところであるが、今年度は見送られる結果となった。これは、18の遺跡で代表される北海道・北東北の縄文文化の文化的要素が、全国の縄文文化と比較して特異なものであり、際立っているという物証的証左に加え、論点を明確にした説得力を持たなかったからに他ならない。

環状列石を例にとってみれば、近年東北以南においても形態は必ずしも環状では無く方形に近い形状の遺構や、またそれに角状の突起を持つ集積遺構など、時代は異なるにしても広義に見れば葬送儀礼や祭礼を中心とする社会性、精神性の伴う遺構と考えられる遺跡が発見調査される中で、今回の18遺跡の特筆すべき、優るべきものは何であるのか、時間をかけて構築する必要があるように思う。

オホーツク文化研究の端緒となった最寄貝塚の調査は、近年の史跡整備に伴う詳細な発掘調査の成果を加えて、周辺地域を含めたオホーツク文化の特質をより鮮明にすることとなった。今後の課題としては、最近の調査成果を踏まえ、過去の調査資料の再検討を行う中で、オホーツク文化とは、オホーツク人とは何かという課題に取り組み、研究を進めていくことが必要である。

記念講演会と並行して行われたポスター発表では、先ず北海道考古学会の50年の歩みを辿る資料として、会発足第一回総会（昭和38年10月19日）の記念写真が目にとまった。前列は大御所が、中壇から後列にかけては詰襟姿の高校生が17名、セイラー服の女子高校生2名ほどが壇上を占め、まさに次代を担う若き勇者が未来を展望する姿であった。

戦後の考古学の調査は、昭和30年代以降、経済の高度成長期に入り、いわゆる行政発掘による大規模な発掘調査が行われたことにより、考古学上の貴重な資料を得て人類文化の解明に大きな貢献を果たしたことも事実である。ポスター発表で紹介された遺跡を紹介すれば、旧石器文化の遺跡として白滝遺跡群、ピリカ遺跡。縄文文化の遺跡として大正3遺跡、鷲ノ木遺跡、東釧路貝塚遺跡、南茅部の縄文遺跡群、船泊遺跡。続縄文文化遺跡としてフゴッペ洞窟遺跡、西島松5遺跡、常呂川河口遺跡。擦文文化の遺跡として北大構内遺跡、標津遺跡群、江別古墳群。オホーツク文化としては青苗砂丘遺跡、目梨泊遺跡。アイヌ文化・中近世の遺跡として二風谷遺跡群、勝山館が紹介された。解説は各教育委員会職員諸氏が担当した。

記念講演会を閉じるにあたって、北海道考古学会会長大島直行氏から北海道考古学会の期待するもの、今後の在り方など抱負を述べられた。



2013年度遺跡調査報告会のお知らせ

今年度行われました北海道内の遺跡調査についての報告会を以下の通り開催いたします。

開催にあたり、例年通り発表遺跡の資料と地域ごとの発掘調査の概況を掲載した資料集を刊行します。
また、報告会終了後には懇親会を用意しておりますので、こちらもぜひご参加下さい。

○日 時：2013年12月14日(土) 10:00～17:00 (開場 9:30)

○場 所：北海道大学学術交流会館

＊北海道大学正門から入ってすぐ左側の建物です。

＊公共の交通機関をご利用下さい。

○参加費：無料(資料集は1,000円で頒布予定です。)

○報告遺跡(予定) 【 】内は主な時代・時期

木古内町 新道4遺跡、札苅7遺跡、大平遺跡、大平4遺跡【縄文時代後期・晩期】

函館市 サイベ沢遺跡【縄文時代中期】

北斗市 茂辺地4遺跡【縄文時代中期】

厚真町 ショロマ1遺跡、ショロマ2遺跡、ショロマ3遺跡

【縄文時代前期～後期、続縄文時代～中世アイヌ文化期】

置戸町 勝山2遺跡【旧石器時代】

羅臼町 サシルイチャシ【アイヌ文化期】

浜頓別町 ブタウス遺跡、日の出遺跡【縄文時代前期・中期】

＊報告遺跡および順序は変更になる可能性があります。

○懇親会：17:30～(会場・会費は当日ご案内します)

○その他：当日書籍等の販売・チラシ等の配布を希望する方は事務局まで御一報下さい。

※本報告会は、道民カレッジ連携事業です。

月例研究会のお知らせ

北海道考古学会では、以下の予定で月例研究会を行います。予定の変更については随時学会ホームページ(<http://www.h7.dion.ne.jp/~hokkoku/>)でお知らせいたします。

第4回研究会

○日 時：2013年11月16日(土) 15:00～

○会 場：北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟(W棟)W517教室

○発表者：富樫那美氏(早稲田大学大学院)

○テーマ：副葬土器を通してみた北海道における縄文時代晩期と続縄文時代前半期の墓制

第5回研究会

○日 時：2014年1月25日(土) 15:00～

○会 場：北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟(W棟)W517教室

○発表者：高倉 純氏(北海道大学埋蔵文化財調査室)

○テーマ：未定

○発表者：三谷智広氏(洞爺湖町教育委員会)

○テーマ：擦文期の貝塚とその特徴(仮)

第6回研究会

○日 時：2014年2月15日(土) 15:00～

○会 場：未定

○発表者：永谷幸人氏(苫小牧市教育委員会)

○テーマ：未定

○発表者：大坂 拓氏(宮城県教育委員会)

○テーマ：本州島東北部における「続縄文人南下」ルートの変動とその背景(仮)

※事前申し込み・参加費不要

※問い合わせ：北海道考古学会事務局 hokkaidokougokakkai@yahoo.co.jp

北海道考古学会の歩み（7） 北海道考古学創立の頃の思い出（その3）

野村 崇

『北海道考古学文献目録』のこと

北海道考古学の文献目録と言えば、松下 亘氏の労作『北海道考古学邦文文献目録』の4分冊を思い浮かべる考古学研究者は多いであろう。

本書の第1集は、1886（明治19）年から、1960（昭和35）年に発表された北海道内の遺跡・遺物に関連する文献を、刊行年月別と著者別に分けて収録し、1961（昭和36）年12月に刊行された。B5判100頁で、巻末に附録として、北海道関係期刊誌一覧と在道考古学研究者74名の住所と勤務先を掲載している。最終頁の奥付上には、趣味の限定版豆本などでよく見られる「限定300部の中本冊はその第〇番である」と印刷されている。ちなみに、私の所持本には、赤ペンで13の数字が入っている。

第2集は1966（昭和41）年10月刊、全96頁。（付）として、「樺太千島考古学文献目録」を所収。第3集は1972（昭和47）年5月刊、全121頁。（付）として「北海道旧石器・中石器文化分類文献目録」を所収。第4集は1976（昭和51）年3月刊、全112頁。最後となった第5・6集は、1976年から10年分の合冊で1987（昭和62）年7月に刊行。（付）旧千島・樺太考古学文献目録（1976～1986）が巻末に収録されている。全311頁の大冊である。

北海道考古学に数多くの功績を残した松下 亘氏は、残念ながら、1999（平成11）年7月11日病氣のため逝去された。享年74歳であった。氏の北海道考古学に対する最大の功績は、この考古学文献目録にあったと考えている。



資料1 松下 亘編『北海道考古学邦文目録』1961年12月

× × × × × ×

ただ、それに先だつもう一つの文献目録があったことは意外に知られていない。

具体的な話から始めよう。さきに挙げた松下編『北海道考古学邦文文献目録』第1集の「発刊にあたって」の末尾に「……なお「日本旧石器時代文献目録」「北海道考古学文献目録」に教示を受けた点もあり、夫々の編者に対しお礼申し上げる」と謝意が述べられているが、後者の「北海道考古学文献目録」については、若干の説明が必要かと思われる。

私が学部3年生になった1958（昭和33）年4月に、函館東高校卒の佐藤一夫・北見柏葉高校卒の桑原護君らが明治大学文学部考古学専攻科に入学してきた。そして、大学サークルの考古学研究部にも入部した。さっそく、同期の遠間健爾君らも加わって、北海道考古学グループという組織を立ちあげることになった。手はじめに、北海道考古学史を学ぶための基礎となる文献目録を作ることにした。

大学の考古学研究部には『ミクロリス』というガリ刷やタイプ印刷（1952年創刊）の伝統のある部誌があり、また、後に学長となる戸沢充則氏がガリ切りをしたという『あゆみ』と題する謄写版印刷の連絡誌などもあって、ともに学史研究が盛んだった。たとえば『あゆみ』4号（1954年）には、アイヌ史研究のために必要な50編ほどの文献リストが中村斎・川崎利夫両氏によって掲げられ研究史の重要性が説かれている。そんな気風の溢れるなかに入った私たちは、『考古学雑誌』や『人類学雑誌』など有名なものばかりではなく、『西郊文化』とか『あんとろぼす』など東京周辺でしか見られない諸文献を、講義のあき時間にせっせとリスト化していった。

そのような作業をくり返しているうちに、1958年末までの北海道の考古学文献386件を目録化すること

ができた。

1959（昭和34）年8月、私は白滝遺跡の発掘に参加する際に、旭川郷土博物館に立ち寄った。当館学芸員の佐藤忠雄さんに本リストを見せたところ、同館の研究紀要に寄稿することを勧められた。東京に戻って原稿を整理して送ったが、しばらくの間、活字にはならなかった。翌年に入って『旭川郷土博物館研究報告』（人文科学）第2号が、12頁の別刷30部とともに送付されてきた。

同誌の奥付の刊行年月は、1959（昭和34）年10月となっている。

×

×

×

数年前の晩秋の発掘じまいの頃、道南の縄文遺跡の調査現場を、畏友、佐藤一夫さんと見て歩く機会があった。その夜、一献を傾けながらの話のつれづれに、往時のことに話が及んだ。このことについては、彼も同じ思いを持っていたことを知り、少しホッとするとともに一挙に酔いが廻るのを覚えた。

（終）

資料2 明治大学北海道考古学グループ編
『北海道考古学文献目録』1959年10月

追川郷土博物館研究報告（人文科学）第2号		49		
北海道考古学文献目録				
明治大学北海道考古学グループ編				
番号	年月	文 献 名	著 者	著 名
1	19	函館古石群発掘	東原謙11	
2	19.2	札幌近郊セプト及其他古墳の事	渡瀬庄三郎	人類誌1の1
3	19.3	北海道後志支庁に対する縄文石器の遺跡	渡瀬庄三郎	人類誌1の2
4	20.3	グロウコフエーションシスト		東人誌2の13
5	20.3	網を具す石斧	若林 勝邦	東人誌2の13
6	30.4	北海道の内耳環	神田 孝平	東人誌2の14
7	20.8	古器物の文字	坪井正五郎	東人誌2の18
8	21.9	石器時代の遺跡遺物は何物の手に成つたか	坪井正五郎	東人誌4の31
9	22.4	北海道に於てアイヌ人種研究の急務と石器時代住民の分布	石川 貞浩	東人誌4の38
10	22.10	北海道石器時代の遺跡について	小金井良博	東人誌5の44
11	22.11	続北海道石器時代の遺跡について	小金井良博	東人誌5の45
12	23.4	北海道石器時代の遺跡に関する小金井良博氏の説を讀む	坪井正五郎	東人誌5の49
13	23.5	北見国レブン郡発見の石器及び土器	代田亀次郎	東人誌5の50
14	23.6	北海道北見国礼文郡(レブンモシリ)に於て発掘せる土器等	代田亀次郎	東人誌5の51
15	23.11	北海道上川原市の石器	武藤留之助	東人誌6の56
16	23.12	The ancient Pot-dwellers of yezo Report of the United States National Museum for 1890.		
17	24.4	北海道の石器	坪井正五郎	東人誌6の61
18	24.7	北海道美瑛に古き跡尋ねるの記	吉田 東彦	東人誌6の64
19	24.12	石狩国樺戸郡月形村字丸山の石斧	旗河 卓雄	東人誌7の69
20	26.2	石狩国上川原野の石器	旗河 卓雄	東人誌8の83
21	27.2	網走の巖穴	旗河 卓雄	東人誌9の95
22	27.2	三角形の石器	若林 勝邦	東人誌9の95
23	27.10	石狩川旧岸穴居人遺跡	高畑 宣一	東人誌10の103
24	27.11	北海道旅行中の人類学上の見聞	中沢 義秀	東人誌10の104
25	28.11	樺太孤島の遺跡	齊藤秀次郎	東人誌11の116
26	28.12	樺太孤島考古誌	高畑 宣一	東人誌11の117
27	31.7	日高の石器	羽柴 雄輔	東人誌14の148
28	32.11	北海道旅行中の見聞記	大野延太郎	東人誌15の164
29	33.1	北海道利尻島発見の石器及び其附属の石質	佐藤 伝蔵	東人誌15生166
30	34.11	北千島以北の内耳土器	島野 徳康	東人誌17の189
31	36.4	北海道樺島国森村発見の石器時代遺物	村岡 啓	東人誌18の205
32	38.6	礼文島の石器時代遺跡	原 忠五郎	東人誌20の231

入退会者のお知らせ

《新入会員》 ※五十音順・敬称略

國木田大（北見市） 種石 悠（網走市）

《退会者》 ※五十音順・敬称略

嶋田賢一郎（江別市） 武田一郎（札幌市〔物故〕） 三野紀雄（札幌市）

会費納入のお願い

会の運営には、会員の皆様のご協力が不可欠です。会費の年内納入にご協力いただきますようお願い申し上げます。また、本年度を除く過去3年以上の会費が納入されていない会員には、北海道考古学会誌を送付していません。会費納入を確認後、送付いたします。

郵便局口座番号：02770-6-8358 加入者名：北海道考古学会

年会費：（一般）5,000円 （学生）3,500円

学会の新メール・アドレスのお知らせ

北海道考古学会事務局ではメール・アドレスを新たなものにしました。今後の連絡はこちらまでお願いいたします。

新アドレス hokkaidokougakakkai@yahoo.co.jp

会誌編集委員会からのお知らせ

会誌第50輯への投稿について

前号の日よりお知らせしました通り、『北海道考古学』第50輯（2014年3月刊行）は特集号として刊行予定です。論文・報告等の一般投稿の希望締め切り日は過ぎましたが、もし投稿を希望する会員がいらっしゃれば、至急編集委員会にご連絡ください。なお、特集号のため、紙面の都合上、掲載が叶わない場合もあります。あらかじめご了承ください。

原稿締め切り日 2013年12月25日（水）（必着）

会誌編集委員会事務局 〒069-8555 江別市文京台11
札幌学院大学 白杵研究室
TEL : (011) 386-8111
E-mail : usu@sgu.ac.jp

北海道考古学会だより 第107号 2013年11月10日 発行
発行所 北海道考古学会（ホームページ：<http://www.h7.dion.ne.jp/~hokkouko/>）
事務局：〒052-0031 北海道伊達市館山町21-5
伊達市噴火湾文化研究所内 北海道考古学会事務局
TEL : (0142)21-5050
FAX : (0142)22-5445
E-mail : hokkaidokougakkai@yahoo.co.jp
印刷 北海道図書企画 (011)668-1131
